

見沼田んぼの歴史

見沼代用水は、享保12年（1727）8月に工事が開始され、利根川右岸の下中条村（現行田市下中条）の取水口から約60Kmに及ぶ用水路が、享保13年2月着工以来6ヶ月という短い工期で開削され翌3月取水が開始となりました。

見沼代用水は、大宮台地に沿って西縁では東斜面を、東縁では西斜面を削って、削った土を反対側に積み上げながら一定の勾配で掘削する方法で作成され、流れは安定していましたが利根川で取水後、農繁期は水田灌漑のため下流ほど流量も川幅も少なくなっていました。

見沼代用水と並行して中悪水路（排水路）も新規に開削されて桶川から流下する芝川と結ばれて見沼新田の余剰水排水路となり、こちらは流れも水量も通年安定しておりました。

見沼新田開発の3年後の享保16年（1731）には、東西2本の代用水路と水位差が3mある芝川を結び途中2ヶ所ずつの関（閘門）を設け水位を調節しながら船を上下させる仕組みを持つ、わが国最古の閘門式運河といわれる見沼通船掘りが開削され、見沼代用水および芝川縁辺の村々と江戸を結ぶ運河が形成されたことで芝川―荒川―隅田川と、人も荷物も半日で江戸まで運搬することもできる、見沼通船が始まりました。

こうして生まれた新田が見沼田んぼとよばれるようになり、享保16年の新田検地後は年々4,960余石の年貢を江戸幕府は確保することができ、引き受けて耕作することになった周辺の村々にも江戸という巨大市場を確保できたことで、新田での米生産以外にも長芋、小麦、サツマイモなどの作物出荷や、貴重な柿渋の生産も始まるなど大きな恩恵を与えました。

しかし、新田や畑が機能するためには水の供給だけでなく肥料の供給が必須です。用水沿いの大宮台地の斜面林は雑草雑木も大事な緑肥の供給元になりましたが、見沼通船により当時のもっとも貴重で大事な肥料、江戸庶民の屎尿（金肥とも呼ばれた）が回収され、専用に運搬する「おい船」で運びこまれるようになりました。

100万都市江戸に運ばれ消費された米が庶民の糞（米が異なると書きます）が金肥として回収され畑で再利用する、近年注目される循環式農業が行われていたわけです。

見沼通船は昭和5年（1930）までの200年間続いたあと、明治以降発達した鉄道やトラックに荷物や人の輸送の座を明けわたしました。

昭和20年代～30年代、食糧増産政策のため代用水から芝川にかけての棚田が農地整理され、農薬散布などで田んぼのドジョウ、サギ山のサギなどの生き物が少なくなっていった。昭和46年（1971）減反政策により見沼田んぼから田んぼがほとんどなくなり畑になった。見沼代用水は昭和53年から始まった三面護岸工事により浄水場への供給元ともなった。

次ページ以降の県土地水政策課作成パンフレット「見沼田圃の保全・活用・創造に向けて」からの抜粋資料も参照ください。（文責：小島文一）

1 見沼田圃の位置及び現状

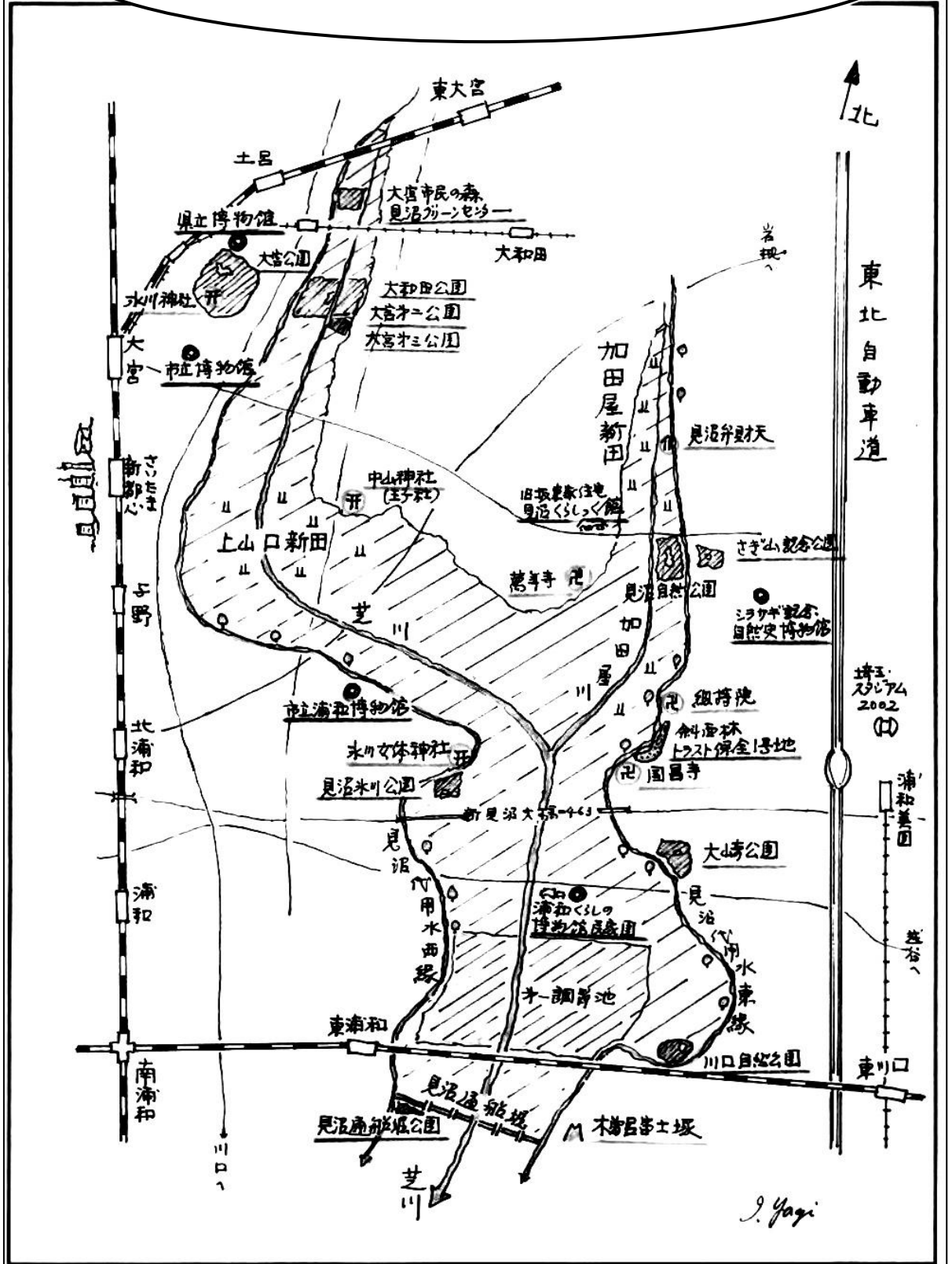
見沼田圃は、さいたま市及び川口市の2市にまたがり、東京から20～30km圏に位置しています。

南北は約14km、外周は約44km、面積は約1,257.5haとなっています。各市ごとの面積は、さいたま市1,199.4ha(旧浦和市656.1ha、旧大宮市543.3ha)川口市58.1haとなっています。現在は、畑が最も多く、主に花木や野菜等の生産が行なわれています。その他としては、公園、グラウンド等として利用されています。

2 見沼田圃の歴史

<p>海の入江の時代 (縄文時代)</p>	<p>○見沼田圃は、古くは東京湾の海水が入り込む入江でした。 ○見沼田圃周辺は、そのころ形成された縄文時代前期の貝塚などの遺跡が数多く見られます。</p>
<p>沼・湿地の時代 (弥生時代 ～1628年)</p>	<p>○約6,000年前を境に入江が後退し、荒川の下流が土砂で次第に高くなり東京湾と分離した沼や湿地となりました。 ○見沼は三沼、箕沼、御沼などとも表記されてきましたが、これは当時沼であった名残りと考えられます。</p>
<p>農業用溜池の時代 (1629年 ～1727年)</p>	<p>○徳川家光は、財政的基盤としての水田確保のため、伊奈半十郎忠治に見沼田圃を灌漑用水池とするように命じました。 ○1629年(寛永6年)、忠治は見沼の両岸の最も狭くなっているさいたま市(旧浦和市)大間木の附島と川口市の木曾呂との間に堤を築きました。 ○この堤は、長さが8町(約870m)あったことから八丁堤と呼ばれています。これにより、見沼中央を流れていた芝川がせき止められ、平均水深約1mの溜池(溜井)が完成しました。</p>
<p>田圃の時代 (1728年 ～現在)</p>	<p>○8代将軍吉宗は、幕府の財政改革(享保の改革)のため、井沢弥惣兵衛為永に見沼溜池の新田開発を命じました。 ○1728年(享保13年)、見沼溜池を干拓し、代わりに利根川から見沼代用水西縁・東縁を掘って水を引くことにより、見沼は田圃として生まれ変わりました。</p>

見沼イラストマップ



J. Yagi

イラスト提供: 八木一郎氏